

官後も、医局の行事には遠く千葉から必ず駆けつけて頂き、私達卒業生の近況を尋ねられ、よくかわいがって頂きました。感染症病棟の改築の件で、琉大と当時の厚生省との数年に及ぶ交渉が暗礁に乗り上げて膠着状態になった時のことです。最後の策として厚生省に直談判するために斎藤先生が小張先生に依頼して一緒に上京しました。斎藤先生の言葉です。「小張先生の凄さは外にでて改めてわかる。聞く耳を持たない役人が小張先生が省内の机を回ると皆、立ち上がって挨拶する。役人の多くは小張先生のお弟子さんなんだ」。決してご自分では偉ぶることのない小張先生の経歴の偉大さを、私は改めて実感しました。

斎藤先生は、小張先生が関わった病院へは、多くの医局員を派遣され支援されました。現教授の藤田先生は就任後、直ぐに東京に住まわれていた小張先生のご実家を尋ね、小張先生、およびご家族からの歓待を受けられたとのこと。2代、3代と第一内科を主宰された教授が小張先生を温かく応援する姿勢を示されたことは、教室員、とりわけ本学の卒業生にとってはとても喜ばしいことでした。

北部地区医師会病院での思い出

小張先生は退官後は、北部地区医師会病院の設立に尽力され、そこでも初代の病院長に就任されました。私が大学院を卒業した平成4年の秋に、最初の出向先として医師会病院に呼んで頂きました。そこでは大学と全く同じく月曜日に総合回診が組まれていました。腕を後ろに組みながら飄々と先頭を歩かれ、主治医への鋭い突っ込みと患者さんに穏やかに話しかけながらの悠々たる回診風景が繰り広げられていました。

その年の暮れの忘年会の時のエピソードです。各部署対抗の余興大会が最大の演目でした。出演直前の楽屋で、医局の出し物であるマジックショーの打ち合わせをしていた時、突然、小張先生が楽屋に入ってこられて「私の役はなにかね？」と笑顔で尋ねられました。大急ぎで、最も見せ場の「風船を針で刺しても割れないマジック」の説明をさせて頂きました。本番では予期しない院長の登場と見事な演技に会場から大喝采を受けました。お顔に医局員と同じペイントをされて、半裸で踊られました。会をにこやかに楽しまれ、そしてなによりユーモアを愛されました。小張先生、齢、77歳のことです。

私はこの時、感染症研究をテーマとして世界を舞台に駆け巡った小張先生の人生経験がなせる技と、ひとり、学生時代の講義に思いを馳せました。世界の至る所で、特に発展途上国で現地に溶け込むためには、同じ言語を話し、同じ食べ物を分かち合い、そこの習俗を尊重することが大事であり、現地と同化する努力を抜きに感染症はできないことを常々授業で触れられました。すでに仰ぎ見られる立場であられながら、大衆の輪へ、自然体で溶け込もうとする姿勢は、多くを語らずも、その行動で大切な教訓を教えてくださいました。

附属病院の揮毫

附属病院の入り口の石垣には、ひときわ大きい琉球大学医学部附属病院の文字が目にとまります。今ではこれが小張先生による揮毫であることを知る人は少なくなりました。この墨痕逞しい揮毫を見る度に、この医療が遅れた沖縄の地に医学部附属病院を立ち上げるために全力で取り組んだ一人の偉大な恩師が思い起こされます。目標とするにはあまりにも大きく、ただ仰ぎ見るだけです。しかし、私なりに30年前に教えて頂いたprofessionの重みを今後も肝に銘じて日々の研究・診療に取り組んで行きたいと思えます。



小張一峰教授 近影

略歴

昭和26年 1月10日	医学博士の学位を授与する
昭和41年 5月 1日	長崎大学風土病研究所教授に任命する
昭和42年10月13日	長崎大学評議員に併任する 任期は昭和44年10月12日までとする
昭和46年 6月 1日	長崎大学を退職する
昭和46年 7月 1日	世界保健機関西太平洋地域伝染病顧問に 就任する
昭和50年 9月 1日	浜松医科大学参与
昭和54年11月 1日	琉球大学医学部教授に任命する
昭和54年11月 1日	琉球大学評議員に併任する 任期は昭和56年10月31日までとする
昭和56年 4月 1日	琉球大学評議員の併任を解除する
昭和56年 4月 1日	琉球大学医学部附属病院長に併任する 任期は昭和62年 3月31日までとする
昭和56年 4月 1日	琉球大学評議員に併任する 任期は昭和62年 3月31日までとする
昭和56年 4月 1日	琉球大学保健学部教授に併任する 任期は昭和59年 3月31日までとする
昭和59年 4月 1日	琉球大学保健学部教授に併任する 任期は昭和60年 3月31日までとする
昭和60年 9月 1日	琉球大学保健管理センター所長に併任する 任期は昭和62年 3月31日までとする
昭和62年 3月31日	停年により退職